江戸の街道探訪　第6回

東海道　（４）街道の難所

の渡し

* 東海道には七里の渡しの他に、もう一つ長距離の舟渡しがある。それが浜名湖底辺を舟で渡るの渡しである。元々、浜名湖は内陸に一つの湖として存在していた。その時、人々は、東海道を遠州灘沿いに歩いていた。その道は、砂州。浜名湖からは浜名川が遠州灘に向かって流れており、東海道には橋が架かっていた。だが１４９８年、大地震が起きる。浜名湖から遠州灘に向けて存在する広い砂州が沈下。潮がなだれ込み、橋はふっとび、浜名湖と遠州灘が繋がってしまう。処の人は、この砂州の決壊を「」と呼んだ。今、切れたという意味である。かくて辺り一面、浅い海と化してしまったのである。家康は東海道を本格的に整備する時、思案する。なにしろ、ここは家康のお膝元であり、重要な軍事拠点であった。そこで家康はこの浅い海を利用し、江戸から見れば大きな外堀に位置づけることに決めた。この浅い海の東西に宿を置き、「舟渡し」することに決める。これが「今切の渡し」である。そして湖の東側に舞坂宿を、西側に荒井宿を設けた。荒井宿の舟渡し場に、厳重な関所を設けることにした。東海道の「出女と入り鉄砲」を厳しく取り締まるためである。後年、荒井の関所は、箱根に次ぐ東海道の二大関所と呼ばれることになる。「今切の渡し」は距離一里（４ｋｍ）。晴天に日には、広々とした水が織りなす風光明媚な景色の中を、大名行列の殿様を乗せた、派手な御座船が行き交ったのである。

舞坂宿

* 江戸から旅して浜名湖に近づくと街道の両側に旅籠が並んでいる。ここが舞坂宿。旅籠の数は28軒。湖が見えてくる。すると2軒の本陣と脇本陣が1軒立っている。過ぎると舟渡場が北から南へ3カ所縦に並んでいる。それぞれ約３０ｍ四方の石畳が敷かれ、石段がある。常夜灯が立っている。舞坂宿では舟渡場をと呼んだ。北雁木（大名専用）、中雁木（武士専用）、南雁木（庶民用、荷物の積み降ろし）である。
* 東海道名所風景で一魁斎芳年は、豪華な御座船が北雁木を出港する様を描いている。御座船には、今切れの渡しを荒井宿に向かって出港する大名行列の一行が乗船しているようである。朱塗り、船には藩幕が張り巡らされ、武士が取り巻くように座し、十数本の櫂が海に垂れている。これからこの櫂が一斉に動くのである。
* ■図１：東海道名所風景７２：一魁斎芳年：舞坂の御座船。大名行列一行が乗船

荒井宿

* 右遠方に弁天島が見え、大鳥居を過ぎる。広々とした風光明媚な光景。一里の航海を終えると、正面に常夜灯、石垣、そして荒井の関所が見えてくる。御座船、帆船、小舟など、いろいろな船がまとまって荒井港に向かっている。荒井の宿場は、関所に繋がって左方に細長く並んでいる。旅籠屋２６，本陣三棟。

■図２：広重：正面は荒井の関所、荒井宿。御座船、帆船などまとまって荒井の舟渡場へ。

* 広重は、今来た航路を荒井の関から舞坂に向かっても描いている。数隻の帆船がこちらに（荒井に）向かっている。背後には白い富士が聳え、手前が荒井の舟渡場。停泊帆船のマストが林立。常夜灯、関所の門と柵が描かれている。
* 荒井（現在は新居）とは遠州灘から打ち寄せる波浪が荒かったところからついた名。安政2年に建てられた関所の面番所が遺存され、今日、貴重な資料となっている

峠（薩陀峠）

* 東海道の山越えの難所と言えば、箱根の山と鈴鹿峠が浮かぶ。海沿いの平地を行く東海道にも、いくつも難所があった。まずは、峠である。由比宿を越して奥津宿に向かう。すると切り立った断崖に阻まれる。この山が薩陀山である。正式名は磐城山。前面の海で漁をしていた漁師の網に地蔵薩陀の仏像がかかる。村人達はこの仏像を大切に保存し、山頂に祀る。人々は次第にこの山を山と呼ぶようになる。しかし、その頃は波に洗われている崖の麓を人々は危険を冒して歩いていた。だが、余りにも危険。幕府は山腹を切り開いて新しい道を造る。これが薩陀峠である。広重の有名な絵、由比「嶺」峠は、旅人が峠から怖々と前方の真白き富士を覗いている光景である。遠州灘の青は映え、帆をはらむ舟が描かれ、手前の岸壁の松は強い風になびいている。動きのある、峠と富士と海の絵である。

■３：広重：由比「薩埵峰」：薩埵峠から見る富士

* 広重は、東（由比）から来て薩埵峠の登り口にある、海岸の崖を利用して建てた有名な茶屋「」も描いている。目の前に、薩埵峠の崖があり、波が押し寄せている。その手前に茶屋、「藤屋」がある。藤屋の２階から海を眺める客、「さざいの壺焼き」の看板、茶屋の前で富士山を振り返り見る女性などが描かれている。
* 一光斎芳盛は、反対の西から、切り立つ断崖を登り「薩埵峠」越えをする大名行列を描く。隊列を乱さずに整然と登る様子が泣けてくる。峠の先に富士が見える。

■４：東海道名所風景５１：芳盛：薩陀峠：西から薩陀越えをする大名行列の一行

宇津谷峠

* 駿府城の外堀たる安倍川をかち渡しで渡り、山間部の鞠子の宿を過ぎるといきなり急峻な宇津谷峠に差し掛かる。これは、鞠子と岡部宿の間にある薩埵峠と並ぶ東海道の難所である。宇津谷峠の麓には、名物「だんご」の茶店が並ぶ。貞秀の「宇津谷峠」は、大名行列がまるで転げ落ちんばかりの急峻な坂道を登っていく様を描いている。茶屋から、参詣道を登っていくと地蔵堂。東海道はその左脇を登っていく。
* ■５：東海道名所風景６０：貞秀の「宇津谷峠」大名行列が急峻な坂道を登っていく光景
* これは東からの登山道だが、西から登る岡部宿からの登山道も昔から大変な難所として恐れられていた。在原業平は「伊勢物語」でここを「蔦の細道」と表現し、薄暗い蔦に覆われた恐ろしい坂道を登る恐怖を述べている。広重が描く「岡部宇津之山」は、秀吉が小田原遠征の際、切り開いた東海道で業平の時よりもずっと開けているがそれでも薄くらい雰囲気が漂っている。
* そしてようやく急峻な坂道を登り切ると頂上に茶屋があり、十だんごを食しながら山々のすばらしい景色に堪能している姿を描いた広重の絵もある。笠、上半身、やっと全身が現れる旅僧の姿がいかに急峻な登山道か、物語る。頂上でくつろいだ後、さきほどの鞠子から登る急峻な坂道を下ることになる。

金谷から宿

* もう一つ、大変な大井川のかち渡りを終えると、そこの待っているのは金谷宿への急峻な坂道である。その様子は芳盛の大名行列の絵に示されている。行列は急峻な坂道を登っていく。問題はこれからである。山々を越え、金谷から宿までの山道は箱根と並ぶ険阻な道として知られていたのである。

■６：東海道名所風景６４：芳盛：金谷：大井川を渡り終えた大名行列は、次は金谷に向けて目前の急峻な坂を登っていく。